

Changes of Onomatopoeia of “Crying” and “Tears” from the Heian Period to the Modern Times

Michiko NAKAZATO*

ABSTRACT

I examined changes of onomatopoeia associated with “crying” and “tears” from the Heian period to modern times. Both of the basic forms of imitative and mimetic words were already used in the Heian period, and most of them were still used in modern times in spite of some changes. *Samezame*, *Harahara* and *Horohoro* became standard onomatopoeias of “crying” in the Kamakura and Muromachi periods, and *Shikushiku* and *Mesomeso* became those of “sobbing” from the Edo period to modern times.

Many imitative words of “crying” were created to give more vivid expressions to a variety of sounds and ways of “crying”. As to mimetic words, objects of description became more detailed like “tears trickling down” and finally focused on “tears” in one’s eyes. Both the imitative and mimetic words were made by transforming.

As the time went by, close observation made descriptive expressions more detailed. This trend is true of other expressions except onomatopoeias.

* Division of languages: Department of Japanese Languages

(4) 「さめざめ」は「さめく」と表記されているため「さめざめ」との可能性もあるが、ここでは清濁の違いは細かく問わないこととし、現代語に残る表記に統一した。

(5) 「泣く」の副詞的表現とその歴史」(『新潟大学国文学会誌』二四号)による。他に「急になく」様子を表す「さと」も挙げられているが、「さと」のように広く他の動作をも描写するものとはここでは取り上げない。「枕草子」に「涙のつと出で来ぬ」という表現があるが、「つと」も出入・進退の素早さを広く表す語なので取り上げない。

(6) 佐藤一九八一では「つぶつぶと泣く」は「ポロポロ涙を流して泣くこと」と解されているが、「つぶつぶと語る」(『こまこまと述べる』)の意味で使われる場合に近いのではないかと思われる。

(7) 山口仲美一九八三では「源氏物語」に見られる「ほろほろと」について、「ほろほろと泣く」「ほろほろと涙をこぼす」を一括して「涙をこぼし泣くさま」と解説している。

(8) 「To prepare to cry, to be on the point of crying, as a child」と記されている。なお、『日本国語大辞典』によると江戸時代には「めそめそ」が「勢いが衰えるさま」も表しており、泣く描写に限定されていなかったようである。

参 考 文 献

- 大久保忠国・木下和子 一九九一 『江戸語辞典』東京堂出版
 尾野秀一 一九八四 『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂
 勝山幸人 一九八五 『寛一本平家物語の文章法―「さめざめ」と「はらはらと」―』『国学院大学大学院文学研究科論集』第一二号

小池清治 二〇〇二 「日本語の擬態語に関する基本的問題 第一部 日本人はなぜ擬声語・擬態語表現を好むのか?」『宇都宮大学国際学部研究論集』第一四号

佐藤亨 一九八一 「泣く」の副詞的表現とその歴史」『新潟大学国文学会誌』第二四号

飛田良文・浅田秀子 二〇〇三 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版

山口仲美 一九八三 「源氏物語の象徴詞―その独自の用法―」『国語と国文学』六〇巻一〇号

山口仲美 二〇〇二 『犬は「びよ」と鳴いていた』光文社新書

J・C・ヘボン 一八八六 和英語林集成(第三版)復刻版(一九七四)講談社

この傾向はオノマトペに限らず、泣く描写全般にわたって言える。中古に見られるオノマトペ以外の「泣く」「涙」の表現は、近世までほぼ受け継がれ、特に声を出して泣く描写は近代まで大きく変わるところがない。その一方で、近世から近代にかけて「涙」のこぼれ方、目にたまる涙の様子などの細かいところに描写の焦点が移っていくさまが窺えた。オノマトペも、その周辺にあるオノマトペ以外の表現も、近代に目指された正確で細密な描写という流れに添って発達した様相が見て取れた。

オノマトペの発達という点から見ると、近代になって涙をこぼす表現はさまざまに工夫されたものの、その先の「目に涙をためた様子」に関しては、描写自体が多い割に新しいものが見られなかった。しかし、時代が下った現代になって「目に涙をためた様子」を表す新たな表現が生まれた。「うるうる」というオノマトペがそれで、現在では一般的に用いられるようになっていく。

現代語では、擬音語に関しては「うわーん」「ひくっ、ひくっ」などの泣き声の描写が様々に工夫され続け、擬態語に関しては涙を浮かべた目を形容するオノマトペが工夫された。この傾向は、中古以来「泣く」「涙」のオノマトペが発達してきた方向の延長線上にあるものと言える。

おわりに

「泣く」「涙」の描写を取り上げて一連のオノマトペをまとめて扱い、時代を追ってそれらがどのように定着しあるいはどのような方向で新しい表現に広がっていったのかを見てきた。調査範囲に多少の偏りがあったことで見落としたオノマトペがあることも考えられ、「むせび泣く」「泣き叫ぶ」「泣き惑う」「忍び泣き」「男

泣き」のような「泣く」の複合語、「悔し涙」「うろろ涙」のような「涙」の複合語についても幅広く調査すると、別の面からも考察できたのではないかと思われる。また、今回はオノマトペの使われ方、例えば男性と女性による表現の違いや、「はらはら」と「ほろほろ」など類義表現の違いなど、意味・用法については考察が及ばなかった。しかし、ある語彙グループの単位でオノマトペを取り上げることで、オノマトペがどのような方向に表現を工夫していったのかを広く見ることができた。以上の反省点を生かして、今後もある一連のオノマトペの変遷について考察を重ねていきたい。

注

(1) 尾野秀一「日英擬音・擬態語活用辞典」を参照した。尾野氏は辞典序文で日・英擬音・擬態語表現を比較しており、その中で「泣く」に関して日本語の擬音副詞または副詞による表現と英語の動詞的表現の対照表を示している。

(2) ひらがな表記の「なく」は中古・中世の主な作品については検索したが、検索が膨大になることを避けて他の作品については調査対象外とした。なお、古典文学データベースは日本古典文学大系(岩波書店)の作品を基にしているため、時代・分野で作品数に偏りがあり、また、「明治の文豪」「大正の文豪」も収録された作家に偏りがある。しかし、本稿はその時代に用いられたオノマトペの傾向を見るもので、出現時期等を問題にするのではないため、偏りも考慮に入れながら、調査範囲に見られた中で一般の傾向を考察した。

(3) 「涙」に分類したものには「落涙」も含めた。

③⑦ 皺だらけの毗に、涙が玉になりながら、たまつて来る。

(偷盜)

③⑧は二葉亭四迷の翻訳作品「あいびき」での表現である。この例に見るように、四迷をはじめ多くの作家達が、近代的文章の成立のためにより細密な描写を目指したが、このような時代の特徴が「泣く」「涙」の描写にもよく表れている。③②～③⑤を見ても、涙が目のどのあたりにどのようにたまり、そこからどのようにしたり落ちていくのかが細かく描かれており、細密な描写という傾向が続いていることが窺われる。また③⑥・③⑦は目に涙が溜まっている様子であり、目の表情という細かいところに焦点を当てた描写となつている。

先に「泣く姿」「涙をこぼす姿」全体を表すものは少ないと述べたが、近代でいくつも見られるそれらの表現も涙の描写と同様、以下に挙げるような細部に目を向けた表現となつている。

③⑧ さすがに声は立て得ないから背を波打たして苦しそつであつた。
(少年の悲哀)

③⑨ 潮の如く漲つて来る涙を辛うじて下唇を噛みつつ押えていた。
(重右衛門の最後)

④⑩ 忽ち湧くように涙をほろほろと流して、其れを両袖で拭いてもやらず立ち上つてその部屋をかけ出し
(或る女)

近代の「泣く」「涙」の描写を見ると、泣き声を出す表現に関しては近世以前とほとんど変わらず、新しい表現は見られないが、泣き声を描写するオノマトペに種々の型が見られた。涙を流す表現に関しては、作家を問わず涙や目に焦点を当てた細かい描写が

種々見られた。これはオノマトペにも該当することで、「しくしく泣く」「めそめそ泣く」「さめざめと泣く」は古くからある表現を受け継いで使われ続け、それ以外の新しい表現や細かい表現は派生しなかつたが、「はらはら」「ほろほろ」のような涙がこぼれるオノマトペは、「ほろり」「ぼろり」「ぼろぼろ」「ぼろぼろ」「ぼりぼり」など涙の粒の大きさや涙のこぼれ方などを表し分ける表現が数多く派生している。

三 ま と め

中古から近代まで「泣く」「涙」を描写するオノマトペをたどつてみると、擬音語・擬態語のいずれも基本形はすでに古くから存在しており、中古に見られたオノマトペのほとんどが近代まで、ひいては現代まで使われ続けていることがわかる。時代によって「はらはら」が好まれたり「ほろほろ」が好まれたり、多く使われるものが一種の流行のように変化しながら現代まで受け継がれてきた。その中で中世には「さめざめ」「はらはら」「ほろほろ」が定型的表現となり、近世から近代にかけては「しくしく」「めそめそ」が声を出さずに弱く泣くときの表現として定着する。一方、時代が下るにつれて擬音語は泣き声の面で、擬態語は涙の流し方の面で、基本形を変化させた変形が工夫されることで表現に新しさを出していく。擬音語は声の大きさや泣き方を表し分けるオノマトペが工夫されるようになり、擬態語は時代が下るにつれて泣く姿全体や泣くときの動作から涙を流して悲しむ姿を表す方向へ、さらに涙がこぼれる様子から涙が目の中に浮かぶ様子を表す方向へと、徐々に描写対象のとらえ方・表現の仕方が細かくなつていく。

椒大夫・杜子春・鹿狩り)

目を潤ませる・涙に潤む(竹の木戸・其面影・忘れ得ぬ人々)
涙に曇った目(くされ縁・あらくれ・学生時代)

涙に濡れる／濡らす(其面影・或る女・偷盜)

目に涙がにじむ(硝子戸の中・或る女・秋・小さき者へ・

忠直卿行状記・報恩記)

涙がこみ上げる・こみあげる涙(土・にこりえ・トロッコ)

目に涙が溢れる・あふれ出る涙(田舎教師・雁にこりえ・

蒲団・星・河霧・泡鳴五部作)

涙が頬を伝う(少年の悲哀・酒中日記・護持院河原の仇討

ち・生・彼岸過ぎまで・武蔵野・忘れ得ぬ人々・家・

旧主人・新生・生まれ出る悩み・俊寛・破戒・春)

頬に涙が流れる(舞姫・富岡先生・酒中日記・それから・

学生時代)

涙が止めどなくこぼれる／流れる／あふれる／湧く／流す

(其面影・土・野菊の墓・或る女／旧主人・秋・新生・

多情仏心・生まれ出る悩み・極楽・奉教人の死・袈裟

と盛遠)

涙が後から後から出る／流れる(明暗・新生・多情仏心・

生まれ出る悩み・小さき者へ)

「泣く」に関しては近世以前に見られたものと同様の表現であった。個別のものでは「爆発的に泣き出した(雁)」「牛の哞き声のような泣き声(或る女)」「割れる様な声を出して泣いた(家)」「恐ろしくヒステリカルに泣き喚いたり(葛西善三集)」「訴えるような声を立てて泣いた(出家とその弟子)」などいくつか見られるが、あまり多くはない。泣き声を表すオノマトペが近代になって多種

見られることと対照的である。

「涙」に関しては、多くの表現が複数の作品に共通して用いられていた。「熱い涙」は涙にこめられた思いを表すような表現であり、「目に涙が一杯溜まる／溜める」「目に涙を湛える」「涙に潤む」「涙がにじむ」などは、涙がこぼれ落ちる前の目の表情に視点を置いて表したものの、「涙が頬を伝う」「頬に涙が流れる」は涙を流しているときの顔の表情をクローズアップして表したものである。「涙がとめどなくこぼれる」「後から後から流れる」は涙が次々に出てくる様子を表すもので、中古から近世に見られた「涙の出来に出来」は「涙を落とすに落とす」「涙続く」「たへずこぼれぬる涙」「涙の頻りにこぼるる」などの表現に通じている。

近世以前にも通じる表現を除くと、近代では「泣く」姿や「涙を流す」姿全体を描写するより、「涙」の流れ方、目に浮かぶ「涙」そのものを、より微視的な視点で表現しようとしている傾向が窺える。この傾向は近世でもいくつかの表現に見られたが、近代ではその傾向が一層強まったようである。以下に具体例を挙げる。

③① 濃い睫毛の下よりこぼれ出る涙の雫は流れよどみて

(あいびき)

③② やがて瞬く睫毛を絡んで一雫の涙がぼたりと膝の上に落ちた。

(虞美人草)

③③ 卯平の眦まなびらからは涙が少し洩れて、その小さな玉が暫く寝れた皺に引掛かってそうしてほろりと枕に落ちるのであった。(土)

③④ どんよりした目には、こびり着いたような涙がまだたまっていた。

(あらくれ)

③⑤ 涙も幾すじか皺だらけの頬を伝わりはじめた。

(一塊の土)

③⑥ 信之の眼もじいっと潤んで来た。

(多情仏心)

がわかる。オノマトペの種類が少ないのに比べ、修飾語句は豊富であった。

中世では、第一項で見たように二種のオノマトペ「さめざめと泣く」「涙をはらはら流す」が定型的表現として多く見られたが、オノマトペ以外の修飾語句で新しく工夫されたものはさほど多くはなく、中古に見られた表現とほぼ同様のものが多く見られた。傾向として激しく泣く様子を表す修飾語句が多い。また、「いとけなき者の泣くように泣く」「童のやうに甘へて泣く」(どちらも「御伽草子」)などの具体的な直喩で表すものも見られた。

近世は、「むせび入って泣く」「声を立てずの絞り泣き」「声を隠して泣く」など大声を出さずにすすり泣くような表現がいくつも見られた。中古・中世では「忍びて泣く」「弱げに泣く」「忍び音に泣く」のように少数例が見られたものの、それ以上に大声で激しく泣く描写が多かった。近世では「わっと」「おいおい」など大声で泣く擬音語が多く用いられているためか、大声で泣く描写は中古ほど多くの種類は見られなかった。それと関連して「足摺をして泣く」「身を投げて泣く」のような激しい動作も中古・中世よりは少なく、「涙に咽ぶ」「涙に暮れて」「涙に沈む」「涙に溺る」など「涙」を流して泣き悲しむ姿を静的に描写するものが多く見られた。また、「涙」に関して「目に涙を持つ」「涙に濡る」「目の内に満つる涙」など、流れる落ちる前の「目」に浮かぶ涙を表すものがいくつも見られた。涙がこぼれ落ちる様子や目に涙を浮かべる様子は中古から様々な表現で表されていたが、近世にはさらに新しい表現が見られ、また涙がこぼれ落ちる前の時点にも表現が及び、涙を流して泣く描写の幅が広がっている。

二二 近代(明治・大正)の表現

明治・大正期の作品には、作家ごとに様々な「泣く」「涙」の表現が見られるため、ここでは全体を通して何人かの作家・いくつかの作品に複数見られた表現だけを取り上げる。()内には作品名を記した。

泣く・大泣きに泣く(あいびき・少年の悲哀・十三夜)

はげしく泣く(生・土・或る女)

声を立てて泣く(生・それから・十三夜・野菊の墓・或る女・出家とその弟子・多情仏心)

女・出家とその弟子・多情仏心)

声を放って泣く(土・家)

大声/声を挙げて泣く(葛西善三集・河童・多情仏心)

涙 .. 熱い涙・熱涙(舞姫・啄木歌集・田舎教師・坑夫・金色夜叉・生・ゆく雲・彼岸過ぎまで・蒲団・武蔵野・海へ・

惜しみなく愛は奪う・旧主人・桜の実の熟するとき・

縮図・新生・青銅の基督・生まれ出る悩み・小さき者

へ・俊寛・破戒・報恩記・泡鳴五部作・夜明け前)

目に涙が一杯溜まる/浮かぶ/漲る/溜める(阿部一族・

浮雲・歌行燈・婦系図・牛肉と馬鈴薯・酒中日記・行

人・坑夫・ころも・其面影・土・野菊の墓・明暗・あ

らくれ・家・戯作三昧・枯野抄・雛・偷盗・新生・多

情仏心・夜明け前)

目/目頭に涙をためる(それから・あらくれ・葛西善三集・

河童・或る日の大石内蔵助・縮図)

目に涙を湛える(金色夜叉・家・学生時代)

目に涙を浮かべる(めぐりあい・阿部一族・金色夜叉・山

〈中古〉

泣く…いみじう泣く いといたう泣く ゆゆしう泣く おどろおどろしう泣く あさましきまで泣く 大きに泣く 泣くこと限りなし 泣きに泣く 包まず泣く せきもあへず泣く 音を泣く 声高に泣く 声を惜しまず泣く 声も忍ばず泣く 声を挙げて泣く 声を立てて泣く 声を放ちて泣く 大きに声を叫びて泣く 忍びて泣く 弱げに泣く 細き声にて泣く 袖をしぼるばかり泣く 袖を顔に押し当てて泣く 足摺りをして泣く 手を摺りて泣く 手を打ちて泣く ふしまろび泣く 身を投げて泣く 地に倒れて泣く 打つ伏して泣く 涙尽きせず泣く

涙 …血の涙 紅の涙 涙の川 涙の滝 涙の海 涙の池 涙の玉 涙の露 雨と降る涙 涙雨のごとく 袖に涙のかかる 涙もとどまらず 涙せきあへず 涙もとどめあへず 涙のひまなし 涙のいとまなし 涙の尽きせず流るる 涙の出で来に出で来 涙を落とすに落とす 涙続く たへずこぼれぬる涙 涙にしづむ 涙にくれて 涙にむせぶ 涙にきりふたがる 涙にまつはる 涙に溺るる 涙にひちて 涙さしぐむ 涙催す 涙を浮けて 涙を一目浮けて 涙浮かぶ 涙もつつまず 目の中より涙出づ 目より大きな涙を流す 涙をたれて

〈中世で新たに見られた表現〉

泣く…泣くより外のことぞなき 忍びもあへず泣く 倒れ伏し泣く 叫び伏して泣く 絶え入るばかりに泣く おびただしく泣く 忍び音に泣く

涙 …涙にむせかえる 乾く間もなき涙 涙に目もくれて 涙かきあへず 黄なる涙 涙の頻りにこぼるる 感涙を催す 涙を両眼にあまして

〈近世で新たに見られた表現〉

泣く…むせび入って泣く むせびあげて泣く 声を立てずの絞りに泣く 声を隠して泣く 声を限りに泣く 絶え入るばかりに泣く 地にひれ伏して泣く 前後も分かず泣く すがりつきて泣く 目を泣きはらす

涙 …湯玉のごとくなる涙 あられのような涙 片目に涙を包む 熱い涙 せきくる涙 漏るる涙 涙一滴こぼれぬ 涙をのどにつまらせて 目に涙を持つ 涙に濡るる 目の内に満つる涙 涙にかすむ 涙にかきくれる

中古の表現を見ると、「泣く」描写に関しては、「いみじう」「声高に」「声も惜しまず」「声を挙げて」など声を出して激しく泣く様子が様々に表現されており、「足摺りをして」「手を摺りて」「伏しまろびて」「身を投げて」など、泣くときの動作が誇張を交えた定型的表現で表されている。「涙」の描写に関しては、「血の涙」「紅涙」「涙の川」「涙雨のごとく」など慣用的な比喻表現が多いこと、「涙とどまらず」「涙せきあへず」「涙のひまなし」など頻りに涙が流れ落ちる様子を表す表現が数多く見られること、「涙にしづむ」「涙にくれて」「涙にむせぶ」など涙を流して悲しむ姿全体を表す表現が数多く見られること、「涙を浮けて」「涙浮かぶ」「目の中より涙出づ」など描写の視点を「目」に当てて涙を浮かべた様子やそこからこぼれ落ちる様子を表す表現が若干見られること

「現代擬音語擬態語用法辞典」によると、「ぼたり」は「比較的柔らかい物のかたまりや液体のしずくが一つ落ちる様子を表す」語で、「ぼたりぼたり」はその「連続・反復形」、どちらも「高いところから落ちる場合に用いることが多く」「落ちたあとの到達点に視点がある」という。「ぼつり」は「ごく小さなかたまりが孤立して存在している様子を表す」語、「ぼろぼろ」は「比較的小さい粒やかたまりが連続して落下する様子を表す」語であり、「ぼろり」は「比較的小さい粒やかたまりが突然落下する様子」で「ぼろりぼろり」はその「連続・反復形」であるという。「ぼろぼろ」は「比較的大きくて重い物が連続して落下する様子」で、「ぼろぼろ」が「小さくて非常に軽い物が連続してかたまりになって落下する様子」であるという違いが書かれている。各語が微妙に異なっており、それぞれの作品で、涙の粒やそのこぼれ方について細かく描写し分けられているのがわかる。近世でもすでに涙のこぼれ方を表し分ける表現が見られたが、近代ではさらにその傾向が進んでいる。「はらはら」「ほろほろ」という中古から見られたオノマトペを基に、濁音、半濁音など音の面で変化をつける一方、例えば「ぼたぼた」に関連する「ぼたり」「ぼたりぼたり」などのように語型面でも変化をつけて、涙のこぼれ方を細かく表し分けるように発達していることが窺われる。

近代の作品では、作家により好まれるオノマトペがある例もいくつか見られた。たとえば、田山花袋の作品では「涙がホロホロと頬を伝って落ちた。(田舎教師)」のように、泣く描写のほとんどが「ほろほろ」で表現されており、二葉亭四迷の作品では「文三は今までの溜涙を一時にはらはらと落とした。(浮雲)」のように「はらはら」が多く見られ、夏目漱石の作品では「宗近君の大きな丸い眼から涙がぼたぼたと机の上のレオパルジに落ちた。(虞

美人草)」「兄さんは眼からぼろぼろ涙を出しました。(行人)」のように、「ぼろぼろ」系・「ぼたぼた」系のオノマトペが多く見られた。他にも泉鏡花の作品は「はらはら」が多く、有島武郎の「或る女」の場合は「泣く」には「さめざめ」と「涙」には「ほろほろ」が使われる傾向にあるなど、作家や作品によって好んで使われるオノマトペがあるようであった。しかし、それらの偏りを考慮に入れても、近代の「泣く」「涙」のオノマトペ全般について、「泣き声」「涙のこぼれ方」の二点で新しいオノマトペを生み出そうとするある種の傾向が見て取れた。

また、近代の作品を検索していると、オノマトペを伴わない「泣く」描写も多く見られた。たとえば島崎藤村の作品や久米正雄の「学生時代」、芥川龍之介の童話以外の作品では「泣く」「涙」という語の検索結果は非常に多いが、それらを修飾するオノマトペ自体は非常に少ない。これはもちろん近世以前の作品でも見られたことである。このことから、「泣く」「涙」を表すオノマトペの変遷について考察するにあたって、周辺にある修飾語も合わせて考察すべきであると考えられる。そこで次項では、オノマトペ以外の「泣く」「涙」を描写する表現について見ていきたい。

二 「泣く」「涙」を修飾する表現

二一 近世以前(中古・中世・近世)の表現

中世・近世の作品には、中古に見られた表現がほとんど受け継がれていたため、まず中古に見られた主な表現を示し、中世・近世については新たに見られたものを付け加えた。

ほろりほろりと ほろり、ほろりつと ぼろぼろ
 ぼろぼろと ぼろりぼろりと ぼつりと ぼたぼたと
 ぼたりと ぼたりぼたりと さめざめ めそめそ
 わくわく じつと するすると

近世に引き続きいろいろな泣き声を表すオノマトペが見られる。大声で泣く「わつと」(二三例)「おいおい」(一一例)は近世以前からあり、近代でも多く見られた。語型を少しづつ変化させた「わーと」「わあつと」「わんわん」「おいおいおいおい」「おうおうと」なども見られる。せき上げながら泣く「え、え、えつと」、悲鳴に近い「ひいと」「ひいひいと」、鼻を鳴らしながら泣く「くすすく」「くすりくすり」「ぐうぐう」、すすり泣きを表す「しくしく」「しくりしくり」「すすく」、赤ん坊の泣く「おぎあ」「ぴいと」「ぎゃあぎゃあ」など、様々な泣き方に合わせたオノマトペとその変形が見られる。また、中古から使われ続けたオノマトペとが近代でも見られたが、その使われ方は非言文一致文(続金色夜叉)²²、時代もの(きりしとほろ上人伝)・「藤十郎の恋」、短歌に詠まれたもの(若山牧水集)²³で、いずれも近世以前の用例と同様に雅語的表現として使われている。

「めそめそ」は「江戸語辞典」に項を立ててあり、「泣く形容には声も立てず弱々しい意」と解説されているが、「和英語林集成(第三版)」には「めそめそ」の項がなく、「めそかく」という動詞の形で泣きそうな様子と解説されている。²⁴江戸時代にも使われていたが、明治時代になってだんだんと一般的に用いられたのではないだろうか。擬音語と擬態語の両面を併せ持つようなオノマトペで大声を出さずに泣く様子を表す表現として「しくしく」とともに、現代にも定着している。

②⑩ 朋子のうしろから、信紀が跳びついて来て、ワンワン泣きながら、腰へぶら下って了った。
 (多情仏心)

②⑪ 「え、え、えツ」と歯を喰ひしぼり、涙をほろ／＼落す。
 (憑き物)

②⑫ 樹の枝へ釣上げられ、後手の脛を空に、反返る髪を倒に落して、ヒイヒイと咽んで泣く。
 (国貞えがく)

②⑬ 何としてさほどつれないぞ」と、よよとばかりに泣い口説いた。
 (きりしとほろ上人伝)

②⑭ 宗吉は、跣足で、めそめそ泣きながら後を追った。
 (売色鴨南蛮)

涙を流す様子では近世ではほとんど見られなかった「ほろほろ」が再び多く見られた。調査範囲内では近世まで見られなかった「ぼたぼた」「ぼたりと」「ぼたりぼたりと」「ぼつりと」「ぼろぼろ」「ぼろりぼろりと」「ぼろぼろ」など「ぼた」「ぼろ」を語基とし、繰り返しや「り」音の添加などいくつかの変形が見られる。

②⑮ 顔を上げた拍子に涙のしずくがぼたりと鼻の先からズボンの上落ちたのを見た。
 (或る女)

②⑯ 涙がぼたりぼたりと兄さんの眼から落ちました。
 (行人)

②⑰ 藁草履を穿いた勘次の爪先に涙がぼつりと落ちた。
 (土)

②⑱ 見ればお増はもうぼろぼろ涙をこぼしている。(野菊の墓)

②⑳ お重は今まで持ち応えていた涙をぼろりぼろりと膝の上に着した。
 (行人)

③⑩ お島は悔しそうにぼろぼろ涙を流しながら言った。
 (あらくれ)

⑭ 三人の稚子たちその手に携り、「よ、」と泣てとゞめ給ふに
(椿説弓張月)

泣き声以外では現代語に通じる「しくしく」(六例)が見られたが、これは佐藤一九八一によれば鎌倉時代の「建礼門院右京大夫集」に一例、室町時代にも「橋姫物語」等に何例も見られたもので、少数例ながら使われ続けていた語であるようだ。「ぐどぐど」は恨み言を言いながら泣く様子で、中古の「つぶつぶと泣く」に通じるところがある。また近世でも「はらはらと」(二例)「ほろほろ」(一例)など涙を流す様子に使われるものが「泣く」描写にも使われている。「ほろほろ」は調査範囲を見る限りでは涙をこぼす描写に使われたものは見られなかった。語型を変形させた「ほろりと」「ほろりほろりと」「ほろと」(各一例ずつ)も「泣く」描写としても使われている。「さめざめ」とは二三例見られ、中世に引き続き泣く様子の擬態語として多く使われている。括弧書きで記したものは「かっぱと／かっぱと伏して泣く」(二七例)「どくと伏して泣く」(六例)という語句形式で見られたもので、泣く描写の一種の定型的表現として取り上げた。

- ⑮ 此中はしくしく泣てばかり居ります。(夏祭浪花鑑)
- ⑯ どうぞ言ひ抜けらるゝなら。言ひ抜けて見てくだんせとまだぐどぐどの忍び泣き。(けいせい反魂香)
- ⑰ 此の岐阜屋道順が一分が廃るとて。ほろ／＼泣いてござるげな。(大経師昔暦)
- ⑱ つめたいまへがみをすりつけ、なみだばら／＼。(傾城買四十八手)
- ⑲ ほろりとこぼす勇者の涙。(伽羅先代萩)

「涙をこぼす／落とす／流す」表現は、「はらはらと」(四一例)「はらはらはら」(二三例)が大半を占めている。「はらはらはら」は「はら／＼と涙を流し(神靈矢口渡)」のように韻を踏むために変形したものである。また、「ばらばら」(五例)「ばらばらばら」(二例)という、「はらはら」に音が近い変形も見られる。また「ほろほろと」自体は見られなかったが、語型を変えた「ほろりと」(九例)「ほろりつと」(二例)が「涙をこぼす」描写として使われていた。涙を流して泣く様子全体を描写するものとして「さめざめと」「しめしめと」「おろおろ」「もたもた」などがあり、中古に見られた「しほしほと」のように心理面も表すようなものがいくつも見られる。「おろおろ」は「おろ／＼涙ぞ道理なり(伽羅先代萩)」のように「おろおろ涙」の形で多く見られた。動詞の面では「涙を落とすこぼす・流す」以外に「涙ぐむ」「涙にむせぶ」という表現が見られた。

以上のように近世では、泣き声と涙をこぼす描写に関して細かい違いを表し分ける工夫が見られる。

- 一四 近代(明治・大正)のオノマトペ
- 泣く…わつと わーと わあつと わんわん ひいと ぴいぴい
 - ひいひいと はつと よよと おぎあ ぎやあぎやあ
 - おいおい おいおいおいおい おうおうと
 - え、え、えつと くすくす くすりくすりと ぐうぐう
 - めめめそ しくしく しくりしくり すくすく さめざめ
 - おろおろと ぐずぐず ぐどぐど ほろほろと ひそひそ
 - しとしとと (がばと)
- 涙 …はらはらと ばらばら ほろほろと ほろりと

(義経記)

「さめざめ」との場合ほとんどが動詞「泣く」と結びついて使われているのに対し、「はらはら」は「泣く」「涙を流す」の双方に使われているが、割合としては「涙を流す」様子を修飾する表現が多い。中古の作品において「ほろほろ」と「泣く」「涙を流す」の双方にほぼ同じ割合で見られたのと対照的である。中世になって「さめざめと泣く」「涙をはらはらと流す」が定型的表現として定着したのである。とくに「涙をはらはらと流す」は「保元物語」「平家物語」「太平記」に多く見られ、「さめざめと泣く」は御伽草子の作品と「曾我物語」に多く見られた。作品により好まれる表現に偏りがあり、また、口承文芸の中で「泣く」オノマトペも定型的表現になっていったことが考えられる。

「さめほろ」とは「沙石集」に二例見られたもので、「さめざめ」と「ほろほろ」の合成語である。それだけこの二語が「泣く」表現として当時の一般的なオノマトペであったことを表しているだろう。「ほろり」とは「涙がほろりとこぼるる」のように現代語にも受け継がれている表現ですでに使われている。中世には、擬音語「わつと」が調査の中で加わった程度で、中古のオノマトペから大きく変わったところはない。「つぶつぶ」「ししと」など使われないものもあるが、「よよと」など多くが受け継がれ、そのうちのほとんどが「さめざめ」「はらはら」で表現されており、新しいオノマトペはほとんど見られない。

一三 近世のオノマトペ

泣く…よよと よよよよと おおおと わつと はつと
わつわつと はあと はああと あと おいおいと

はあはあはあと しくしく さめざめと はらはらと
ほろほろと ほろりつと ほろりほろりと ほろと
ぐどぐど めろめろ (かっぱと かっぱと どうど)

涙 …はらはらと はらはらはら ばらばら ばらばらばら
ほろりつと ほろりつと さめざめ しめしめと
しくしく おろおろ うろうろ もだもだと あつと
わつと はつと

中古・中世に比べて種類が多くなっている。「泣く」を修飾するものでは泣き声の種類が増えたことがその一因である。「わつわつと」「おおおと」「はああと」「おいおいと」など、少数であったが臨場感ある泣き声が見られる。泣き声で多かったのは「わつと」(六四例)である。中世の作品では「太平記」「曾我物語」に一例ずつ見られただけが、近世の作品では声を挙げて激しく「泣く」「泣き出す」「泣き入る」描写として初期の笑話や浄瑠璃、歌舞伎脚本で用いられた。よく似る「はつと」(九例)もあるが、「はつと」は歌舞伎作品に多く用いられた。中古から見られた「よよと」は一例あり「わつと」に次いで多いが、使用範囲は限られており、「椿説弓張月」に二例、「雨月物語」と橘曙覧の和歌に一例ずつであった。「よよよよと」は小林一茶の俳文に二例見られた。近世になると「よよと」は、古い雅語的表現として意識され受け継がれていたものと思われる。

- ① 顔と顔とを見合せてわつと泣き入る。(五十年忌歌念仏)
② 「エエ、お浦山しい。ハアア」ト泣伏す。(小袖曾我)
③ よみ終わりにてお、くくと泣けけるとかや。(おらが春)

ぶと」は③のように何かを言い嘆きながら泣く様子と、④のように涙の粒が落ちる様子を表す場合がある。「つぶつぶと」と同じく「泣く」「涙」の両方に使われたものに「ほろほろと」がある。「ほろほろと」は「源氏物語」等中古の物語作品全般に最も多く使われていたオノマトペであり、調査範囲では二九例（うち「泣く」が一四例）見られた。次いで多いのは「さくりもよよと／＼に」「よよと」を合わせて七例（うち「泣く」が四例）、「つぶつぶと」六例（うち「泣く」が三例）である。

- ⑤ 物もいひやらすほろ／＼と泣き給ひぬるを（夜の寝覚め）
 ⑥ 涙のほろ／＼とこぼるゝをだに「怪し」と、おぼすに、
 （狭衣物語）

佐藤一九八一では「ほろほろと泣く」は「ほうほうと声をあげて泣く場合の表現」であると説明されているが、「涙をほろほろとこぼす／落とす／流す」という表現も多いことから、「涙を流す」行為イコール「泣く」行為ととらえられて「ほろほろと」が涙のこぼれる様子を表す擬態語として同様に用いられ、「ほろほろと（涙を流して）泣く」と表現されたのではないかと思われる。⁷⁾

現代語との関わりから見ると、泣き声を表す「よよ」「おいおい」がすでに使われていたことがわかる。また、擬態語では「さめざめ」「ほろほろ」（「はらはら」もすでに使われていた。「さめざめ」は調査範囲内では「更級日記」「今昔物語集」の二作品に見られる他の物語作品には見られないことから、俗語的性格が強いと思われる。いは平安時代後期に使われたものと考えられる。「はらはら」は佐藤一九八一によれば「讃岐典侍日記」「有明の別」に見られ、「平安時代に多用されたというほどではない」という。「ほろほろ」

が多く用いられるうちに、語音が多少変化した「はらはら」が生まれたものとも考えられ、また「ほろほろ」に比べて俗語的であるか、または平安後期になって使われるようになったものとも考えられる。

一―二 中世のオノマトペ

泣く…よよと さくりもよよと わつと さめざめ ほろほろと
 さめほろと はらはらと

涙…はらはらと ほろほろ ほろりと ほろほろほろほろ
 ほろほろはらはらと さめざめと

中世の作品を見ると、擬音語に「わつと」という激しい泣き声に加わり（二例）、中古には数少なかった「さめざめ」「はらはら」が多用されている。とくに「さめざめ」「はらはら」の二語が突出して多く見られ、調査範囲内で「さめざめと」六二例（うち「泣く」が一例）、「はらはらと」六三例（うち「泣く」が八例）であった。数の上では次いで多かったのは「ほろほろと」であるが、中古で多く見られた「ほろほろと」は五例（うち「泣く」が三例）と大幅に減少している。

- ⑦ 門ヨリ外へ走出レバ、同音ニワツト泣ツレ玉シ御聲々
 （太平記）

- ⑧ まことに物うきことぞ」とてさめ／＼と泣き給へば
 （酒呑童子）

- ⑨ 残るところなくの給ひて、はら／＼と泣き給へば（義経記）

- ⑩ 長者はら／＼と涙をながして、「あはれなる事どもかな。

やもの様子を生き生きと描写するというオノマトペ本来の働きが失われることになるが、その場合その表現はどのような方向で新鮮さや独自性を出していくのだろうか。本稿では人間の基本的な動作の一つである「泣く」描写を取り上げ、オノマトペの定着とそれを解消するために工夫された新しい表現の発達について考えてみたい。

日本語と英語を比較した場合、英語は動詞によって様々な泣き方の違いを表現するのに対し、日本語の場合は動詞「泣く」を修飾する語句によって表し分けていると言われる。たとえば、英語には「泣く」行為を表すものに「blubber/sob/howl/whimper/cry/new」など様々な動詞があるが、日本語ではそれらを「おいおい／しくしく／わんわん／めそめそ／ぎゃーぎゃー／おぎゃー」というように多くオノマトペによって表現し分けている。現代語の例をとっても「泣く」描写に関わるオノマトペは擬音語・擬態語を合わせて数多く存在する。そこで「泣く」「涙」を描写する表現を拾い、特定のオノマトペが定着していく様相と新しい表現を生み出す過程について考えたい。

取り上げる時代は中古、中世、近世、近代（明治・大正）である。近世以前は、国文学研究資料館の古典文学データベースを用い、近代は新潮社のCD-ROM版「明治の文豪」「大正の文豪」を用いて調査した。検索語は「泣く」「哭く」「啼く」「涙」「泪」「なみだ」「涕」とした。²⁾

一 「泣く」「涙」を表すオノマトペ

ここではまず時代別に「泣く」「涙」を表すオノマトペを概観していく。³⁾

一 一 中古のオノマトペ

泣く…よよと さくりもよよと さくりもよよに いかいかと
 おいおいと ししと つぶつぶと ほろほろと
 さめざめと³⁾ しほしほと

涙…つぶつぶと ほろほろと さくりもよよに さくりもよよに
 よ

中古の作品には以上のオノマトペが見られた。調査対象は物語作品が多いため、俗語であるオノマトペの使用も当時の一般的なものと違った様相を示している面もあることを考慮に入れておきたい。なお佐藤亨一九八一の調査によれば中古では他に「はらはらと」が見られるという。⁵⁾「さくりもよよと」にはしゃくり上げてよよと泣く様子の定型表現として「よよと」に含めて考えると、右に挙げたものうち現代語の感覚から遠いものは「いかいかと」「ししと」「つぶつぶと」である。

- ① 御湯度／＼参りて、絃打しつゝ、聲づくりる給ひつるに、寅の時ばかりに、いか／＼と泣く
 （宇津保物語）
- ② 「きんちはやからんときにおこ」とて、おはしましぬ」とてしゝと泣く
 （蜻蛉日記）
- ③ こよなう情なき、人の御心にも侍りけるかな」と、つぶ／＼と泣き給ふ。
 （源氏物語）
- ④ いとみじう胸ふたがる心地し給ひて、涙のつぶ／＼と落ち給ふを、
 （宇津保物語）

「いかいかと」は赤ん坊の泣く声を表す擬音語として他の作品にも見られる。「ししと」も泣き声を表す擬音語である。「つぶつぶ

「泣く」「涙」を描写するオノマトペの変遷

——中古から近代にかけて——

中 里 理 子 *

(平成一六年四月三十日受付)
(平成一六年六月三十日受理)

要 旨

中古から近代まで「泣く」「涙」を描写するオノマトペを見てみると、擬音語・擬態語ともに基本形はすでに古くから存在しており、時代によって多く使われるオノマトペが多少変化してはいるが、中古に見られたオノマトペのほとんどが近代まで使われ続けている。中世には「さめざめ」「はらはら」「ほろほろ」が定型的表現となり、近世から近代にかけては「しくしく」「めそめそ」が弱く泣くときの表現として定着した。一方、時代が下るにつれて擬音語は泣き声の面で、擬態語は涙の流し方の面で、基本形を変化させた変形が工夫されることで表現に新しさを出していく。擬音語は声の大きさや泣き方の違いを表すオノマトペが工夫され、擬態語は泣く姿全体や泣くときの動作から涙を流して悲しむ姿を表す方向へ、さらに涙がこぼれる様子から涙が目の中に浮かぶ様子を表す方向へと、徐々に描写対象のとらえ方が細かくなっている。この傾向はオノマトペ以外の泣く描写全般についても同様である。オノマトペもそれ以外の表現も、近代に目指された正確で細密な描写という流れに添って発達した様相が見て取れた。

KEY WORDS

擬音語・擬態語 onomatopoeias 擬音語 imitative words
泣く crying 涙 tears

擬態語 mimetic words
細密な描写 detailed description

はじめに

オノマトペ(擬音語・擬態語)は音声やものの動き・様子をいかにもそれらしい感じで写し取った語であるため、オノマトペとそれと表現される対象との結びつきは強く、使われ続けている。

ちにその結びつきが定着することがある。たとえば「トントン」はノックの音を、「じろり」は睨む様子を、「てくてく」は歩く様子を表すというように、ある音声やものの動き・様子を表すオノマトペの表現が固定化する。表現の固定化が起こったとき、音声